



9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34

八三  
3156  
7

平  
遼  
寧

橘源

くわくりんまうきけうくぐるぎふあく  
開卷敬駕奇俠客傳第二集卷之五

東都

曲亭

五

次

議もすく耳と傾けうち。听てそのえあらぬひじ。見れどもけふ。辯果ち明朝必當えむす。要事を通達致毛べ。先不益とさう枕ゆ。とふふ小六と意ふ任と。教びと陳席ま着て。又官持を受ふ。程ふ明星二郎以下の甲も小六が義勇と慕ひのれ。将曹と共居ふ益と薦め餌と添て。食を催すもきなふやね。豈くも那引板屋方と泰勝が親あり。木造親改ふ憚りて。這頭立も入まうけれ。小六も争ふ機と猜と。屢々辭ひ。醉と盡まば。稍益枕を收きて。旅館に退き。ひつ折又將曹ふうち對ひて。某今ハ當所す要る。羽真那五柳る。稻城許赴だ。那  
里ふ四五日逗留毛べ。嚮ふ憑まわせくる。願事の起回答。那里へ仰下まえべ。自由の事ふ  
れども和殿と勞りせし。金の手とあらぬひじよ。とふふ将曹応と。内玄関を送り出。亦復一個の走卒を隸て。旅舎を遣つけ。然而小六も黄昏時候ふ例の旅廬ふから來。走卒を勞ひて。門より返へ。只ひとり。杖立と毎一程ふ裡面も出で迎ふ。是則別以  
き。楫取慶吉を曰ふ。小六と相々訝り。慶吉和郎ハ何の程ふ來て留守と存る。

おと。ひるまき。かみこつぶ。と。ちうまち。と。あいかき。と。ト。おもむき。かと。  
ちや。稻城の母女ふ悪ゆゑだや。と向ひ。庶吉さ。い老樹の刀自の病着。既不癒り。かく。信  
ふとのつぶ。  
夫刀祢も善れあらど。這里と東園と云柱の釜を。奶茶のあらど。向も考のぬ出て。涙の裡  
朽らむ。濕繕り。わらぬ。宿あれ。慰難て。困。うち。余程。刃刀自も。妙。も。見身。から來。を。ぎ。ち  
あまう。まち。翠枝とも。も。久。う。音耗。失。え。ね。ば。小可。も。亦。胸安。か。毛。安否。と。詰。ま。まん。を。く。来。牌の  
ころ。ここ。き。そ。う。や。く。ま。ま。つ。げん。えん。あ。ひ。で。時候。か。這里。ふ。來。つ。折。く。館。は。招。れ。見。參。の。み。坐。す。暮。暮。還。き。め。と。幹。櫻。隸の  
ひと。あ。ん。そ。あ。う。ん。り。か。が。ん。そ。れ。ん。目。み。樹。う。と。象。ひ。す。け。れ。が。の。人。を。退。が。立。代。と。あ。か。く。母。あ。り。死。た。余。ま。六。う  
う。考。ま。い。頃。た。く。を。る。喜。ひ。の。毛。か。俺。の。明。朝。辭。一。去。て。稻。城。の。宿。所。舍。ま。く。欲。ほ。然。邊。料。兵。和。郎。卒。て  
も。あ。り。き。り。伴。よ。立。る。極。で。よ。あれ。ど。今。宵。せ。て。毛。又。那。母。女。が。不。樂。て。胸。苦。く。て。を。あ。り。つ。と。り。と。  
ち。ち。も。ま。く。へ。あ。い。る。う。そ。だ。ひ。か。ち。ま。さ。不。と。ち。太。へ。お。ま。く。い。る。され。こ。よ。ひ。め。一。ご。ま。う。か。か。  
庶。吉。頭。と。掉。く。否。五。柳。を。勢。折。久。う。身。邊。の。う。ね。主。の。御。用。も。ま。く。ん。然。今。宵。も  
か。一。こ。あ。り。那。里。ま。明。と。翠。枝。を。還。す。あ。く。め。と。ち。く。期。と。推。と。い。へ。毛。不。樂。り。と。あ。く。い。と。お。そ.  
う。く。あ。る。あ。と。そ。ろ。ま。い。い。い。と。と。ち。く。子。と。お。せ。ん。か。く。ま。い。い。い。と。と。ち。く。子。と。お。せ。ん。か。く。ま。い。い。い。



後と立あぐと詣。薦め宣せよがど。巡回半醒半醉中。緯就るべもあらば。と報て信夫  
むり。うち對ひて。やよ信夫恙も免れ。嚮は三十敵の別荘より。你の厄と拯ひ。折名生男不便。宜  
かねば。故意素生を告ぎ。尔の実の両親の忠誠。并は世ある人。とす。而この大々ふ。ナ  
カニ。廣吉が報うけ。相別れより天の一方年未胸を忘れさせ。と面を昭火ても名告。送ふ知  
る。うき生を。ふ絶て久し。再會の本意。遂に歎矣。俺のまゝを亡親の魂魄。今も古び  
ぞ。きみる嬉く。與れど。除は懷る。墨宣紙を打ちて。食す。或戒名を扇の上ふうち。乘  
せて。これも歎を倍。種を。亦慰る。よもあく。二親達の戒名を。涙と禁めて。并まつ。の  
を。信夫へ堪る。一声高くとも泣く。袖の驟雨。休ま。ゆる。黒の。親のうへ。ゆげ。以へ端  
たる。浮世と知れど。今ゆづふ。覚て悔た。昔の跡。残る。法の名の。を。あだを。食ら。戴る。  
伏ら。拜め。そんと。かる涙。不看む。腸を。断孝。お哀。と。慄。憂心の猿も。駒も。起騒  
ぐ。悲泣。ひどく。愀然。老樹。廣吉。左右。語言齊一。慰ま。信夫へ。まづ。志を。獎め。

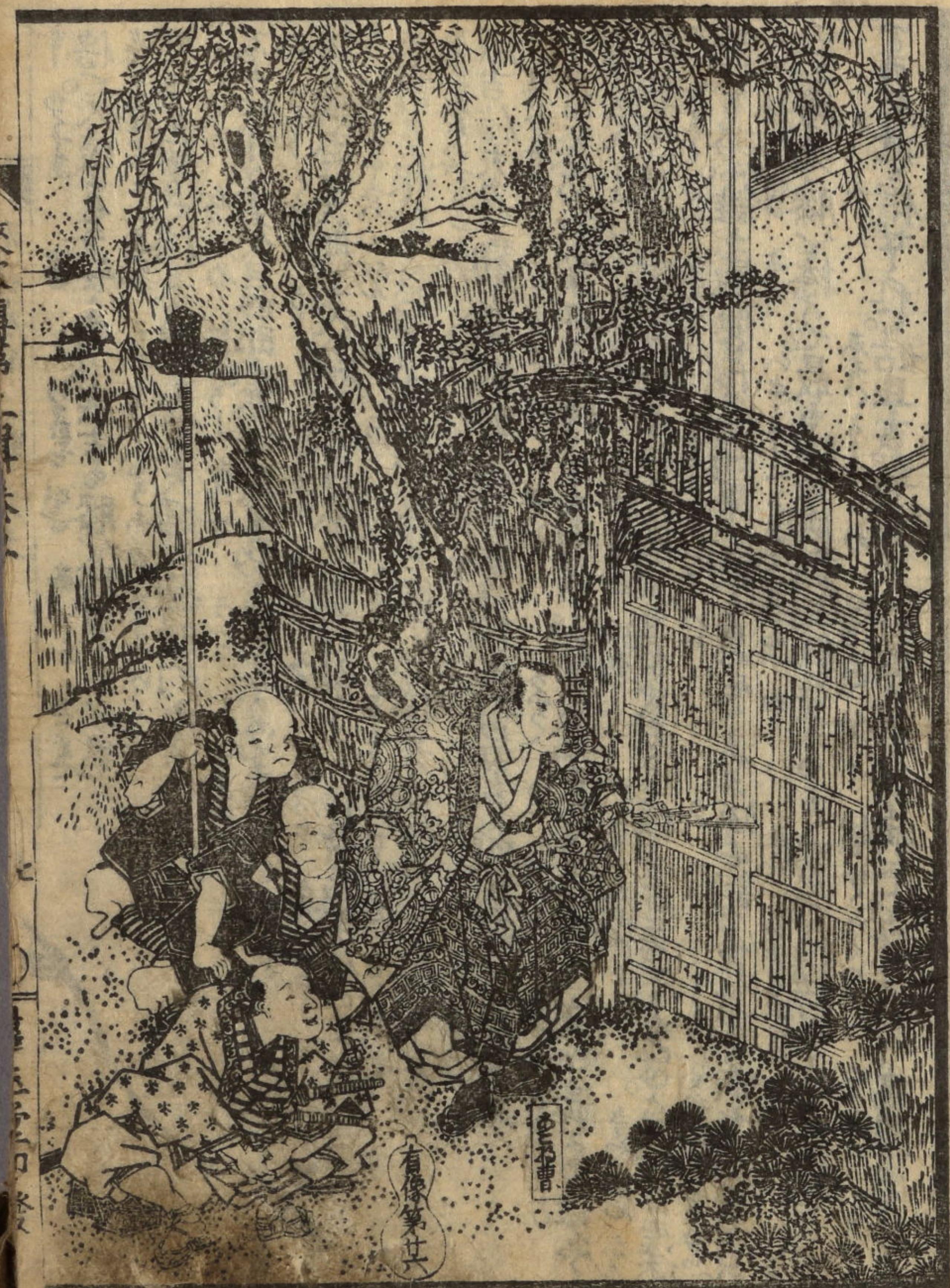
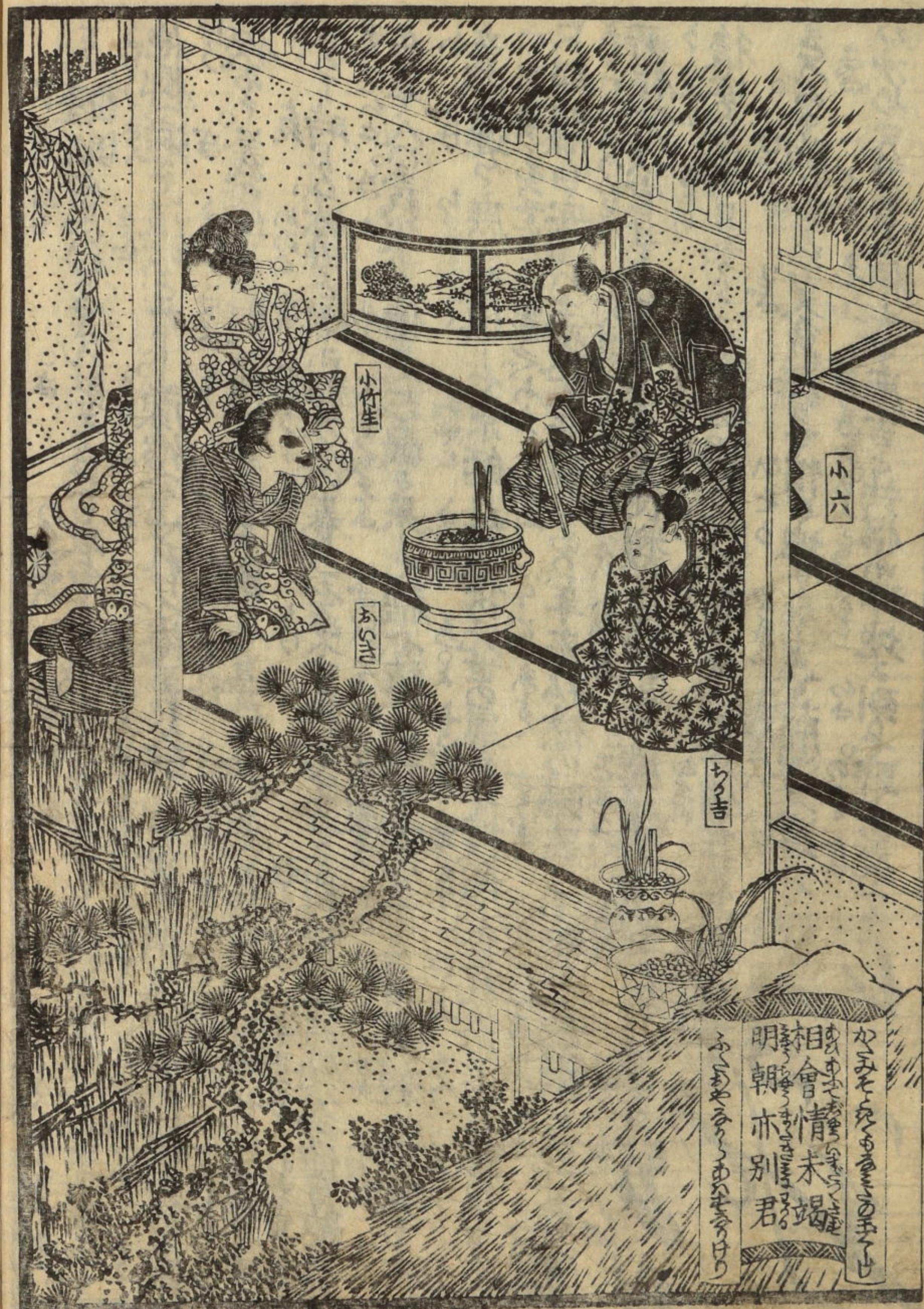
頭を抬げて。死諭の趣へ。辨て。仰が。東。うけ。亡親の。の。惜。と。うち。歎く。歎。哀  
れ。れ。哀。か。歎。あ。ね。俺身の過世。されば。や。親。西柱。も。あ。幼稚に。比。う。養れ  
た。父。食。父。公。と。喪。ひ。ゆ。身。折。も。折。を。舊里の。便。り。ゆ。え。と。又。寒。の。二親。み。る。東。と。の。絶。も。果  
て。本意。る。ま。孰。と。孰。と。口。か。類。云。の。恩。生。産。の。恩。宣。方。の。ミ。友。に。食。工。中。古。最。女。す。の  
田斐。身。ま。く。と。悲。一。の。方。も。き。く。うち。歎。心。精。一。ゆ。か。と。ひ。貌。を。改。ぞ。小。奈  
む。り。対。ひ。額。を。う。そ。絶。て。久。見。參。幼。稚。に。折。薦。ひ。先。れ。夢。の。ご。ふ。侍。れ。ど。然。ば。と。亦。忘。れ。せ  
む。寒。の。親。の。相。計。外。視。と。潜。ぶ。與。の。妹。と。喫。れ。ま。く。る。と。祕。事。も。親。の。名。も。這。里。を。床  
養。父。養。母。そ。今。ま。で。ひ。り。過。せ。て。生。ま。中。と。初。ま。隔。方。史。い。が。か。か。い。浅。く。と。ア。人。と。  
掲。さ。れ。身。の。性。方。枯。む。甲。非。文。足。実。の。親。ユ。生。別。ま。ろ。足。曳。の。山。ま。海。ま。幾。百。里。遠。離。り  
て。六。束。よ。の。ま。う。ん。り。せ。愁。ふ。名。生。る。い。要。多。を。古。ス。と。と。親。の。恥。エ。幼。君。の。死。與。も。ア。ク。る。を。以  
い。よ。の。あれ。入。懲。思。う。年。と。歷。て。幾。ひ。々。急。僕。危。難。と。救。せ。り。大。恩。人。の。素。生。と。向。べ

かと  
は、惶ひる。限り知らぬ旅宿。盤費を肝要す。願ふ返り。這義成  
許へ。とひきとも立たせ。小六を禁り。頭をうち掉り。そく亦要乞辞讓す。俺  
所の信夫が與ふ。年來類育の恩答。母内す志事原を推す。王徳元も養父  
也。ひきをせし英直母屋の忠誠苦節。報を思欲して。做せし更。盤費の多少を論  
せんや。余る不きの不園司より。金二包と贈られ。憊れの盤費よ。其頭のゆゑに懇念  
せし。信夫も慎み听ねか。昨日園司覓參り果て。又別席坐。饗應の折。俺又薦屋將軍と。  
稟入れる二條あり。その一條。件の金を分之。縞城母女ある。恩祿ませし。又一條を  
烈姫信夫が親の窓家を。轂すまく願つて。免許の狀を賜る。爰より。あ妾を稟試る。回答し。ま  
せん。復讐の一條。必免許ある。うべを知り。も請稟せし。奉勝の罪を寛ぐ。追  
放せられ。園司の非法を。と朽すく。めぐれ。縦免許の狀を。めども。他御在て。轂を捕ら。園司を  
禁めが。遂に。遊莫信夫が。甘流のゆえ。親の讐言を。轂す。めども。孝義の道。虧る。や。俺

遊歴の次と。那泰勝の在處を索ね。你より代て數々果た。あの美を俺に任せる。則母へ  
孝行あん。然るて慈愛てみづく料らば。父孝義を盡さんと。老る母は仕事。孝義高  
き。画餅言ひ。命も俱す有らか。後悔其里立すべ。甚麼僥倖の徒も。向ふ老  
樹へ欽びて。信夫が答へ。老母をう。僕る折半男子でも。某捷れるものか。好す簡の意  
矣。淡い母へ女兒へ生賢るう。頭を抬げ嗟嘆して。目今母の稟せよ。大刀抜く御も知ぬ身の心ふる  
信夫の沈吟する。頭を抬げ嗟嘆して。目今母の稟せよ。大刀抜く御も知ぬ身の心ふる  
悍くとも。及反りせらる。母御庇ふと。親の仇を報ひ。捕らるて。平手毬。耘る風。  
源太が坐て。啖どり凡鄙語。似る果報。左は就。右は就。甲斐。元氣の  
甘す。そら。涙と推拭。小六。然と領ひ。あくび又商議。信夫の母も听ま  
まの國司より贈金。金と分り。せぬ。餓渴を免るべれど。那泰勝。親ゆ好  
む。俱よ國司。重信せられ。黨と植君を惑。權威内外。充満。れば必死。母女を憎  
む。

三。睡此の恩ひ。えん。然るて危急取危急。今愚意と計。失速。當断を失。  
他御避。憂。他御。避。憂。と。な。豫備。も。せれん。侮。義父野上史。著演。大人。の。海内獨歩の豪  
傑。義の與。財を惜。善惡與。と。憂。を。分。悪。拉。福。辞。せ。侮。身九才  
を。一時。よ。母と。俱。か。那大人の。養。を。受。る。ま。所。せ。報。し。せ。母。の。侮。父の。讐。敵。藤  
白隼人。義父。も。讐。言。を。敷。果。と。福。を。禳。ん。與。入水。示。世。之。親。三。欺。本  
意。遂。廢。吉。と。俱。京師。旅宿。比世。風声。搜。聞。義父。上。善。也。全  
只。那。藤。白。安。同。主。從。不。覺。咎。年。来。私。慾。贓。罪。那。折。露。顕。及。之。遂  
後。安。苟。且。暮。一。暮。稔。親。物。思。せ。不。好。肩。信。せ。事。あ。實。不。孝。人。と。之  
所。領。没。官。せ。而。妻。子。并。從。類。追。放。され。縛。体。正。可。よ。の。事。之。然。之。  
先。も。胸。苦。化。更。れ。い。急。悄。地。廢。吉。藤。澤。遣。そ。親。心。慰。め。と。乃。者。恩  
ひ。決。や。万。自。信。夫。も。廢。吉。と。共。侶。那。地。到。野。上。底。寓。千。萬。人。の。帮助。

かみそとまもすの玉子  
相會情未  
明朝亦別君  
ふともうめまくはり



卷之二

倍て久後生ても安處矣。廣吉も膝ひざを找りてよき听果ききごであらぬよ。和郎わらわが那地なじより赴むかひ野のより  
宿所しゆしょは留とどりて信夫しんぶと俱ともよ大人夫婦おとこふみ奴婢ぬし助すけ們もんふ仕つかふ。是則忠孝ちゆうこう孝たかを付麻ふじまをと椎しいる  
不ふよ。和郎わらわが実父じみちち四郎よしろう。大人おとなが因いん義ぎを薦すすめるのも又信夫しんぶが実じみの親英直翁えいじゆうとも。もの死死  
後ご。孤忠苦こくちゆう節せつを大人おとなが知しれて白紙しら紙の空翰くうかん計けいアドアド。俺身わたくしと俱ともよ何んの實母じみのね屋や居ゐの刀と自じ立だつ。まともまとものぼううをあそびでる。ひでるをあらう。  
年許ねんき又類たぐいれる恩おんを復おもす。是實じみの親おやぢの與よふと。俺身わたくしよ代かる忠孝ちゆうこう。俺做わたくし足あしらず。孝たかと義ぎを  
廣吉ひろよし信夫しんぶ力を勤つくて。代かて野上のうじょう親子おやこよ盡つくさ。老樹ろうじゆの刀と自由じゆゆ所ところをめ。今いまの憂鬱うう苦くを忘うつ。日暮ひぐれ  
人ひと是良舍じよしやの計策けいさく。那里そこを優ゆる去向いきり。そと云いふと意いを陳めて辯べんひ。俺知し所ところはあらず。參さん  
心こころを丹田あんてんよ落着おちつけて後悔ごくわいを。信夫しんぶの母おやぢも否いまでもう。俱ともよ尋たず思おもひ。と眞まこと示あらわす遠とほ  
謀智略ぼうちりく。誰だれも感服かんぱくせばざ。死死を听果ききごと呴くと息いきをも。不返ふへんを詞ことも。要いをのら。別べつを惜くむ廣吉ひろよし。  
頭かしらを搔かき。膝ひざを捺なり。最さいも惶きよた御教訓ごきょうくん鈍とがに耳みみもよく聞きこえて。推辭すいしをも。どうひらひ。便たて身みを惧おのせられ。姑おば且よ吉野よしのよ在あり。比既ひじよ必死ひしきの病厄びやくを救すくひ。高恩たかおんあり。苟ま且よ

えせ 異ぐるよとまきま  
つス。ちまと 不づ  
そく。世の宿因驥尾は附く蟻の千里の外よもても仕へまくと報ひ。とゆひのを今や  
らおれ別れを本意す。内甚御のゆきをと口説。信夫も涙を拭ひて稟をも无礼を  
るときが。兄とて稱へまく。昔としに亡父母ふ相見る心地せうれす。その歎びの幾日もか  
を。又お別れをきり及だ。身の往方を果敢とせ。と密山音ふ。歎ひの杜の傍りの  
言の葉ふ。世の春を。秋より悲しき物思ひ。露霑の袖を又濡る。胸の纏暎た雨障  
を。脊間の絶て。すり身。小六を傷る。光景を。左見右見。嗟嘆。と。信夫の餘波を惜む  
も。庶吉まじめ女を。益處を諄言。箇痛う。縦何時も。俺後は。跟て旅宿をよろ  
とも。甚なりのあんや。快。藤澤は卦にて。大人ふ仕。奴婢助の陪堂ゆる。  
せ。習ふとも。も。思ひ。愚魯。身は一藝を備へ。を。主の與す。も。身  
ら。別を惜む。忠。義。欲。信夫。這。義を思ひ。が。僕の親の寃家。の。庵殿。と  
ら。尚覗姑峯より東在。俺那山を踰たり。山より東鎌倉頭。那奉勝。井

かく。何をもとよき仇を報ひ。怨れべ久り。僕大人の從者となり。その身の利あり。然ざも否歟と理  
推て。將大されど。稍曉得る。磨吉信夫の共伴の貌を改め。額をうそ。寢ふ手帳のみに置。或  
旨ふ後ひあつて。藤澤アを赴くべれ宜く。計せぬ。と願ふ。小六も歎び。お一段の手宣  
去向へ陸路水行。おせん歎まざ思決ひ。ども野上の大人をもあらま。書翰のヨヌ氣ふ在す  
日。既す寫り措く。汝達那地不到り。信夫の母と歇店ふ送り。磨吉ひとり僕消  
息を懷ふて。藤澤。野上の宿所を赴き。悄々地主夫人の對面。請ふて書翰をまわす  
とト。おのぶ。名をとびと。せよ。やうが力自とも信夫をも必召取りゆえ。然而大人の汝達が。素生を善くも向ひ。信  
夫の養父守延主の忠義の趣との身の顛末。磨吉ハ亦養父の殉死及実の親昌四郎。  
義死の趣懲々と。潛ち不報宣しぬ。お餘の身の書中あ在り。且僕もと向れ實。汝達決  
あく告げて。尚向の見聞。隨ふ報宣をも。ト。もあくねど。大々向れぬ。僕も

あこせうさう。この かいきうち。けもあこぬ。不とまう。さとあ。  
 英虞將曹でひをと名する老樹へ心づく。現英虞主をうつけ。行程遠の里を往ひ。  
 守延が退隱より十稔あまりと歴あれ。鰐や相送れぬ。誘這方へと先は立て。客房  
 へ案内とぞ。賓、王の席送の辞讓寒暖を陳悉を祝。ほどせ一程か廢吉を遅く。  
 汲りて薦る茶礼も果て却将曲日づけ。稻城主の勤仕の折某同僚もれべ交とも  
 亦疎うづり。不慮の事退隱の後へ送よ憚りあり人の批評も影護ゆ。胡越せ  
 くいひだ。毎日へ息女めらを。刀自のみぐら向注所へまわる。折くも。の職役はやむ。  
 對面もぬせよ。及べ。王の遠行息女め窮厄心苦一念のまわり。ふ料も好幫助も  
 られ。愁訴の筋も空一か。毛縛圍圓ふ理り。ひ蔭まゝ教ひ思ふ不幸の中の幸多け。  
 最も愛々しう。とおも老樹の涙咲て。應するのまゝ。山間隠れの苔清水胸あ堰き  
 心地やあけん。惘然と。姑且の頭を抬げぬ。す。將曲日然てと。意中ふ猜と。連りふ  
 着て出で來。將曹君とも對ひて送の口誼言訖れば。將曹君をう膝そ枝を。齋は廣れ  
 まち。かのうで。那不條の御所望と。寡君を披露はす。の旨と伺ひ。寡君則宣。達  
 鮮目走る。扇を思宜三。傷は措ひ。喃刀自那達生へ。這許ふと在も。將曹君訪  
 生を贈り。金子を分ち。稻城守延の妻子を取せよ。か。も。達生のあらゆ。左も右  
 せよ。俺が指揮せん。又あやび。又信夫が復讐の願ひ。那泰勝の罪定り。既小  
 追放ある。之を又信夫が復讐の願ひ。那泰勝の罪定り。既小  
 倘他御そ。數年捕矣。俺が知らぬやう。よろ。老樹信夫。冤家の従方を索く。餘  
 當國を立去。思ひ。勿論。他們が隨意。倘亦泰勝が立還。そ。俺封疆。小唇株が  
 再犯の罪許。まく。捕。首。刎。遠旨を。達生答へ。と仰られ。御所望  
 ふまへ。せひ。ま。不如意是。非。及。が。おのえを。あらゆ。が。と報。が。小六。まうち。御所望の趣義。憚

ありとまことに法律を度て錯れ、復讐の謀も起るべく然が免許の状をもとを那泰  
勝の信夫が與ふ。親の冤家ふ相違ゆき。數もあらば天運は儘まるふとひり。所望も稱  
せむ。使札もとむ辨ぎをも。然る來訪せられ。老疎略すり。御深志見れ感謝勝  
が。とくに將曹嗟嘆して。寔は不思議の良縁也。辨顔數度も及び。実は莫逆の恩  
あり。高き當所不逗留あらば。折々お訪ちうて。教養受んと思ひ。某今番鎌倉へ年始  
使と命せられ。首途中とぞ近道を。異日の再會料りか。廢殘念の義も。どくを小  
六と訝り。そりと遅延。年首の嘉義故あるべく候と向べ。將曹頭を掉り。否故あ  
ひひび。鎌倉殿へまわ。せり。使の軍か一度も例水行を便宜。正月二月は海上の風波穩  
重。正月は到て。遣差す。今茲ハ某使命を稟て。後日首途致き。どうも小ち沈吟  
き。幸ひあるべし。知り。如く稻城母女當所を親族の後見とぞ。因  
き。そぞ幸ひあるべし。知り。如く稻城母女當所を親族の後見とぞ。因  
き。東國の所親許遣えと思ひ。商議既ふ整す。伴ふ幸まぬとぞ。尚少年を廣  
吉の三百里を及長旅。免へ心のとどき限り。もとなりふ甘美。とぞひ難る折も。傍扁便宜  
あり。倘附船を允うる。寔是より附驥の大幸。その義と許容。ゆきや。と向べ。又將曹も靈臺時  
頭を傾げ。とぞ日夕を工じ。僕私の旅を。使命の船。すと。上裁を経て。あらざれば。美引る  
終と。言ひ。畢竟半身所の御所。望ま。這意を以ゆえ。む。必障ひ。すと。某ちうるは。行  
装を。急せ。首途へ。後日。志摩の鳥羽より乗船。在那里來會致ま。べ。とぞ。小六を  
おこ。すと。飲ひ。そぞ慚愧を。乞ふ。尔く。老樹信夫も。告知と飲べ。その義を仰せられ。と志摩で  
度吉と。喚。近着。て。候。と。詞せり。吟吟れ。度吉。あらぬ果て。走そ。奥へ退り。余程の老  
樹信夫。俱。衣服と更り。そぞ客房。おまけ。度吉も。亦後を跟て。ぞぞ席末。まほ。登  
時。小六。老樹们。那附船の幸。ゆ。箇様。きよ。と。説示せ。若樹信夫。異議も。ゆ。せ  
あく。将曹。か。お。飲ひ。陳る。も。將曹連。不頷。た。那船中の男子の主。詞敵。ふ。う。の。要れ。  
元く。徒然ふ。や。ん。き。ん。邊。莫風。あ。た。う。ね。袋。日。あ。で。東。す。到。え。翌。只。一日。暇。身。り。風。

猛可の起行所為ヨヌる。又鳥羽老樹面談せん快々準備とて最正音の懸念。告別し身を起せば小六も惧み歎びと陳く齊一目送り。折々五柳の村長へ傳ふ小六が縚城許來る。又知之。安否を向々來あれば老樹へ歸て囁入れ。小六と恨み對面を登時老樹へ村長。猛可ふ東國へ移徒の緒を告知。此の田園と家宅。翌一日ふ佑ち。欲すもの幾々計せんや。特むと村長うの。そひ火速の。又田地を素より沽券あり。家宅も買んとある。鰐生且引受て。金子を調進致す。又退と那這へ商量り。よく考て。翌朝聞す又來て。せむと親切に慰め。出で。身背り。這夜小六が来路。と。不詳。听て。老樹信夫。茶を喫。果子を薦め。骨侍。坐。漏度。吉。まへ。耳新。心地。と。更。聞く。を。知。まつ。却。説。の。詰。早。村長。を。あ。來。老樹。小六。商談の趣。うち。受け。縚城の田園。家宅と。共。十五金。買。食。べ。高價よ。售人どね。外。商量。あ。と。老樹。心難。て。委。時。小六と商量。竟。あ。意。儘。

せり。村長へ寫來ゆる。券書一通を懷よ。食牛打毬にて老樹を見せえふ六石をせす。則ち  
六石を保へ。花押を請て。券書を收め。金を遞與つ。前途を祝して宿所へ還りけり。余程の老  
樹信夫の守延の後世のもと。香華院。馮元と。亦復小六と商量をも。相計らむ。任。庶吉事  
留守と委ねて。老樹信夫。小六と俱。又稻城氏の香華院。実證寺へ赴き。住持の和尚。對  
面。請ふて東國。穆徒の。よと陳別を告て。且守延の墓碑料。千。金十両。又稻城氏代々の  
祠堂料。一千両。共ふ。三千金をも。母河。住持。敬鷲。慰め難て。茶果城薦ら。く。管  
待。ま。當下。小六。住持。對ひ。某。東國。初。來。信夫。兄。他們。鳥羽。送。裏て。  
再。當。寺へ。參。詣。焉。不。右。ユ。と。を。そ。の。折。毛。件。の。墓。碑。建。要。と。期。と。推。其。住。持。  
異議。夢。點頭。て。ち。義。あ。る。故。祠堂金。寺記。載。墓。多。忌。日。香。華。寺。向。永  
代。記。祿。の。旨。と。傳。て。廻。向。自。斷。ゆ。主。ま。う。ん。の。義。あ。う。安。る。よ。と。覺。心。納。所。の。僧。ふ。夕。寢。  
寫。せ。そ。遞。與。され。け。遠。辯。果。て。老。樹。信。夫。小。六。と。俱。守。延。墳。墓。詣。り。尚。殯。の。見。が。

草を挿水を沃ふを俱み合當のうちの中繰返年來信夫を養育の缺口を告  
奇遇を稱て弥陀仏を念され老樹信夫公を屬すと限の墓參程遠くも建  
氣の墓表あるをよの。身の往方別をうの妻よ子よ夢野の秋よりねども思  
絶ねばあつて芽出楓の紅涙花見里黒木音を泣く哀憤限りて。小六諫や將も俱  
を宿所還け是よりて起行の準備暇を折る近鄰の莊客老樹が遠旗或を守  
延が弟子の親のまへ件のよほ惜別惜みて各々來共侶は帮助に行荷を送り果  
翠の啓行を送りと連れて還る。混雜ひづむあむ。日暮果てゆゑ其頭  
主を整ひれば小六門戸を鎖す。老樹信夫庶吉们を燈下に招集聚會と同贈氣  
三百金を送り出で。五十金を送り留め。則一百半金を分せ件の三名。一個をと遞與  
あてゆあ。手を錢別するを守志。裏肚。三重表制衣と。懷收ゆ。然而藤澤を赴き。  
惱火人許落着魚の金を伏す。皆大人不羣とて衣食の費を充て。佳と年大人の素よ

て義の與ふ財と惜みのねど。然がとて初より大人の危會すと。各自本意を度す。縱野  
上お障りあて同居の願ひ遂くとも金あれ時宜は儘と進退を定め易く是足併困  
司の恩禄各々の身を及ぼし。毫末害を心ひ。而して幽司の性君子の風を惜む。一思慮浅け  
とが。恐ひ易くて日非ふ暗る。俺復讐の一條を信夫が代り乞票せ。那泰勝を當面の  
隠一措せと。故の。又那英虎将曹も才子であれども心古。老實也。當今浮薄の武  
士似も。とどかん身母女の附船を慮る。されど那船中へ總て敵地と思做して昼夜断  
走。但那船中の事あらず。昨も。这里も。那船も。木造の船と。信夫が與ふ物を。要すとどなへ。勿論別離の情を説  
覗きのあん鳥羽の港口ふ至る。各々詞寡か。要害をとどなへ。勿論別離の情を説  
て。うち酒を笑れ。その美ハ刀自と信夫が與ふ物を。泰勝も。那船中へ總て敵地と思做して昼夜断  
走。又懷よ。書翰一封を拿出で。廣吉も。示せ。這通は野上の大人。悄々地をす。泰  
走る。金と一所。甚衣の襟を縫收。とやく妙と。俺も迹へ大人のよ。認と

小六ヶ半  
雙々履フジシ  
ゆそ不苑フジツ  
示せ一ヒメ  
ボタイボタイ  
菩提達ボダマ  
の葱嶺ソウリ  
故事コトヨリ  
れるタマコ  
便タマコ  
是タマコ  
前集セシラ  
著アキ  
演エク  
が小コトヤリ  
花ハナ  
蔓ハサウエイ  
心ハラ  
照ハラハラ  
日ハル  
火ハラマ  
連广脱履リョウコトス  
の顛末モトス  
詳ハラマ  
録ハラマ  
かカ

おまえども。内に相添ひのうあれ俺行裏をと來よと吩咐。食事寄せ。親切だ。が  
うち。さく。あざうり。いそぐ。とうじ。えまんりらむ。ちまち。こ。  
内よ。半隻身。庭草履を。遠く食事。件の書翰共侶。廣吉ふ遞與。うるさき。そ  
草履。去稔の四月俺狂乱のあり。ちと。入水と相模河示せ。折穿て。ちまち。庭草履。那折。俺  
その半隻へ渡船の内よ留め。又半隻へ後徵。收措する。の。が。と。俺大人よえさせまわ。立  
地よ。疑ひ解け。勿論外視と憚り。傷ふ人の見に折。坐礼と陪話。をまあまよ。遠饒のゆ  
嚮ふ示し。短夜氣。再び。通途も。胸よ復。必よ忘。うだ。老樹の刀自。村長より。受  
であひ。八十五金の残り。身。見る。俺がまあせる十金と。共侶よ秘藏。有用の用と辨。久。野  
上の宿所。歌り在。ぶ東西の没る。と。あとも。信夫が與。然。を。う。の。財禄。を。い。あ。ぐ。今。足  
が。の。そ。う。せ。く。利一統の世界。やう。寧。静。海陸の通行。か。ても。あ。う。然。と。も。海賊。の。患。ひ。う。と。ま。べ。う。只。謹  
慎。と。宗。と。と。用心。は。優。エ。と。信夫も。惧。は。樹念。と。身。と。愛。一。親。と。慰。る。と。第一の懸。ふ。せ。よ。人。皆  
行く。と。ま。え。ち。か。不。可。能。み。う。の。云。び。ね。う。ま。ひ。り。あ。げ。ん。せ。り。白。く。て。と。云  
行。も。住。る。前。知。あ。え。と。云。え。う。俺。御。吉。野。旅。宿。せ。比。仙。娘。の。示。現。す。夢。夕。去。向。向。ま。う

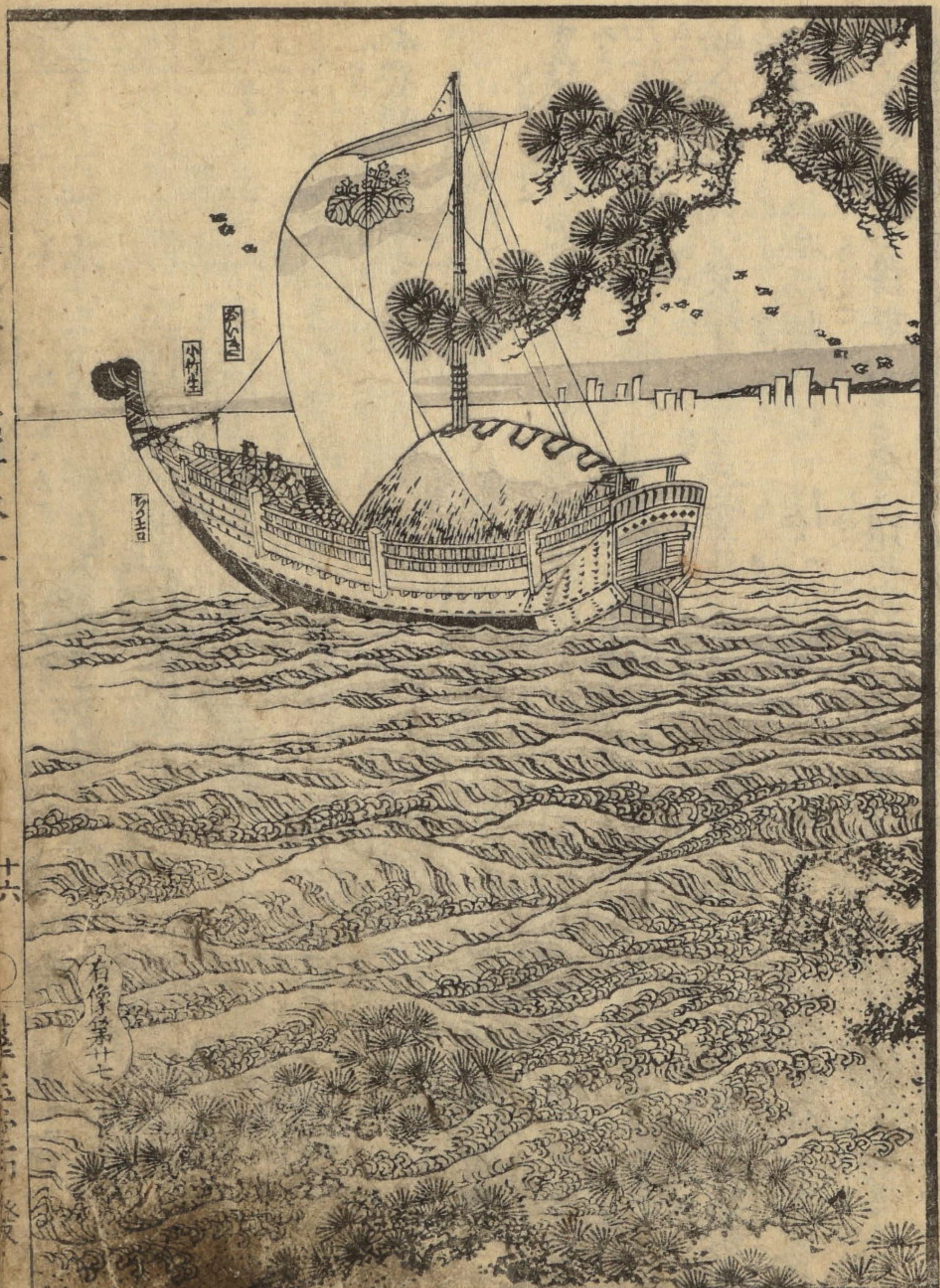
搭さり急かはきら然かはきられかはきら老お樹じゆ们めい行ゆ轎こし子こへ要うきうとと信しん夫ふも俱とも辭さひひ。大家おおやかた听き諸よ声こゑ。亦また蓋あわせ口くち誼ゆを備そなへ村むら。每まいの仁じん義ぎ五ご常じょうの片かた端は。申まこととと辨べん知し。這裏こゝの良よ人ひと。亦また折おり說せつも示あらわしし。御ご庇ひとと恩おん深ふか。况あ且よ兒こ子こ孫そのの習ならはて眼まなこのアキラ。只是大おほ人の丹だん誠まこと。蓋あわせ御ご恩おん。惜うれし。大人おとなの世よを去はなり。迹あと立たて妻め子こ達たち。妻子さいじ達たちの遠とおく東ひが所ところ親許きんしょ。移うつ住すの首くび途と送おどり。僕わたくしの身みをを送おどる。餘よ餘よ二に三さん里り許こゆ。其その頭かしら袂そで袂そで。袂そで袂そで。皆みな商しょう量りょうりょうと來き。誰だれと還かへ。誰だれと還かへ。公こう任おき用ようと出で。快こころ樂らくと催促さいそく。誠まこと意い旨し。舍すて見み。立た去はな。也あ。老お樹じゆ信しん夫ふ。云い云いと又また推しのぶ辭さ。且よ感かんトと且よ勞ろう。小こ六ろく。俱とも住す。棄き。家いえと村むらと遙とお與よ。鳥とりの茂林めうりん。時とき候こう行ゆ裝うぶと立た。出で。則そなへ二に挺さしだ行ゆ轎こし子こ。老お樹じゆと信しん夫ふと。乘の。則そなへ三さん挺さしだ行ゆ轎こし子こ。老お樹じゆと信しん夫ふと。乘の。則そなへ二に挺さしだ行ゆ轎こし子こ。老お樹じゆと信しん夫ふと。乘の。吉よしと。乘の。人ひと馬うま齊そろ一いつ整せい。後あと跟つ先まへ。既すで足たま搔か。草くさ。老お樹じゆ信しん夫ふと住す。

馴なまれ。里さと離はなれ。憂う憂う涙なみだ。膝ひざ流ながれ。玉たま走はし。竹たけ轎こし。搖ゆ。鳥とり自じ物もの音おと。啼なまく。春はる寒さむ。天あまも。名残なごり。別霜思べつしやうし。消き。歎かな。西條さいじょう。未ま未ま。村むら。人們じんぞく。這こゝ處ところ。齊そろ。割わり。笠かさ。印いん。盆ぼん。勸すすめ。辭さ。家路いえじゆ。還かへ。中なか馬うま牽く。轎こし。轎こし。昇の。年と來き。特とく。親おやぢ。かわら。隣となり人ひと。甲こう。俱とも。鳥とり羽は。送おど。推しのぶ。辭さ。听き。霜しやう俱とも。夜よ。玉たま。宿すく。稻とう城じゆ母め女めの。醜う。庶しよ。吉よし。門かど。立た。英えい虞じゆ。未ま。到いた。程ほど。余よ。連つづ。小こ六ろく。鳥とり羽は。馬うま頭かしら。歌うた。店てん。十じゅう餘よ。名な。并あわ。鑑かが倉くら。管かん領りょう。晋しん物もの。長なが韓かん根ね。夫め役わく。昇の。先まへ。卒そく。身み。轎こし。不ふ。美う。障さ。裏さ。港こう。旅りょ館かん。來くわ。れ。小こ六ろく。み。づ。裏さ。迎むか。稻とう城じゆ母め女めの。送おど。事こと。向むか。持も。將まつ。曹ざわ。敢あらわ。異い。議ぎ。及およ。御ご。所ところ。望のぞ。趣き。家いえ。未ま。達いた。度ど。身み。轎こし。不ふ。人ひと。之の。處ところ。委まか。下くだ。鑑かが倉くら。某まことに。底そこ。預あらわ。給あらわ。船ふね。中なか。一いつ回まわ。其その。

水をさうも羽のひとよまわけ  
水のひとよまわけ

鳥羽凄小六送東行船

かそみ入りぬ風のまへ



契。故の歌店よからず。老樹信夫。将曲日づのうと。懶々と報て明る天を等みけり。  
豫られよりあれ。老樹信夫。今や。心細ある。方舟を。俱ふ然と。甲夜と。枕よ  
就れ。夢も結び。浦風よ吹。敬萬されて魂と傷あらまと。余程。詩五英虞。持舊  
うち使どと。順風よ。船を。快出ゆ。といひ。小生。聽て稻城の母せ。そぞ立て安を  
走。登時。這里まで送來。五柳人。稻城の擔物を。抬げ起。船を運び。其頭ふ立。目送  
けり。小六も亦。度吉。鎌倉へ着船の。ち折。笛様。と。其を示す言の訛り。行擔物。牛  
馬。あれ。馬まれ。央を。藤澤へ。惧。といひ。錯。よ。よくせよ。忘を。属け。皆共侶。水際ふ立。と。驚  
程。將曲日も。生て來。逃の口誼。言訛れ。老樹信夫。も。将曲日。欲びと陳。去向と。枯。度吉。さよ  
ね。船入。扶けられ。無糧。憂苦。重荷の蓬庵。留る。海上の。安寧。憂異。と。祈る。星  
舟。再會。契。詞。口隠。涙。胸。盈潮の順風。真帆。引抗。思ひ。渡。哀別離苦豫期。なる。多  
堪。歎。松浦。鏡の宮の故事。も。懐。思ひ。渡。

西  
搖られて安ら。母も草も兩腕額に當て臥け。がく。足をひき。まよ。呂山越え浪ス浮宿鳥憂  
われ。ちきら。きぐ。事。あ。の下。話説。却説小六。件の船と目送り果て五柳へ行を告。某は是る  
事。山田内外の神宮参詣せむ。欲す。ひ。日稻城の墓碑のタ。那香華院へ逃へたる。  
かへま。亦復立寄て。各位。對面せ。どうぞ。大家うち。听て。考。入。馬。え。竹轎。まれ。又うち  
衆て。や。を。の。俺。们。も。共。侶。太。神。宮。參。廟。一。ある。議。任。ゆ。と。薦。め。果。一。き。う。ト。小  
六。を。肩。も。詞。を。書。と。推。辞。て。馬。も。轎。子。も。ち。み。返。遣。強。て。案。内。を。見。と。よ。村。人。二。名  
許。と。俱。と。駆。下。山。田。赴。き。り。鳥。羽。よ。り。三。里。過。ぎ。這。日。内。宮。外。宮。と。拝。て。朝。熊。二。見。の。浦  
を。も。漏。き。と。と。巡。歷。考。又。兩。宿。三。宿。五。柳。村。か。り。ま。ち。徑。よ。寒。證。寺。と。赴。に。こ。基  
碑。の。り。と。詰。ふ。石。云。ま。功。を。卒。ね。四。五。寺。と。留。ら。左。右。寺。程。と。守。延。の。墓。表。成。跡。と  
けれ。が。小。六。住。持。相。譚。と。を。建。日。追。薦。法。延。と。用。経。讀。し。御。向。老。樹。信。夫。を

送り。五柳の村人むらじんを送り寺へ招き聚食。終日御食應うきよけり。好事訖こゝろり。小六こごと又守のふをき。あらうめりとおもひゆ。みてみそ。ふせ。ついせんねん。延の一週忌いっしゅう三回七回の讀經料よしりょうを。逆比皆寺かくひへ布施ふせと。追薦おほせん萬町寧むちゆう。りり。と。住持じゅじも。吾わ。村人們むらじん。ひよ。すま。感佩かんばい。と。ぬき。施主せしゆと。と。稱め。け。當下とうとう。小六こごと。高たか。俺去歲おとせの夏なつ。西にし。到いた。久ひさ。吉野よしの。在いた。一いつ。が。ひき。五畿ごき内うち。も。視畫しそう。ま。伊勢いせ。伊賀いが。河内かわち。和泉わいずみ。相津さが。紀き。伊の浦いのうら。も。原是はら。南朝なんじょうの御領ごりょう。君きみ。就中さゆう。相津さが。河泉かわいずみ。也。楠氏くす�の。廿舊蹟じゅうきゆき。是い。下くだ。那三州なさんしゆを。初はじ。と。四國しこく鎮ちん西にしの。盡つく。死死。も。曲まげ。徧歷はんれき。止とど。と。尋思しんし。と。村人們むらじんの。留とど。る。や。も。か。と。飄ひよう。然れんと。と。只ただ。萬里まんりの。逆旅ぎれりょ。赴たつ。及いた。案下あんげ。某生更あらわ。說いわ。河内かわち州しゆ石川郡いしかわぐん金剛山こんごうざんの麓はづき。字あざな。八九はくくと。喚よ。做つくる。山里さんり。孝烈こうれつ。每雙まいぜうの。才女さいじょ。あり。り。も。祖先そせん。と。原はら。も。故おとこ。河相かわあわ。泉いずみ。三所さんしゆの。守まも。贈正三位せいじうさん。近衛きんえい中將ちゆうじょう。榻朝だくじょう臣正成みまさか卿けいの。為ため。曾孫そぞう。從五位下じゆうい。河内かわち守まも。楠正元くすひるひ。男左衛門尉正おのざゑもんい。勝むすめ。の。女兒めのわらわ。その名なを。姑磨くしま姫ひめと。稱め。ひら。應永四年えいえいよんねん。誕生たんじよう。父正元ちかひら。その兄正勝まさかつと。共とも。ちた。や。あ。さ。う。き。う。く。う。せ。う。き。う。せ。う。も。侶とも。平劍ひらつる。破赤坂はくせき。要害要害。築城つきじゆう。て。數年すうねんの忠戰ちうせん。父祖ちちそ。又劣またれ。也。建德元年けんとく。正勝まさかつ。

仲容集卷二

正元京より  
入て戦没  
のる諸説  
蘇く元中  
九年五月  
とをあや  
イフタリヨ  
一説又憑  
れども

春の時候情を地ふ京師より赴きて。有一日義満將軍の參内に折玉卒と紛れて。重車を近づけ  
て。ひども車を碎く蒼海公。帮助もあらず單身にて宿望遂を辯護覺れて。千變萬化と御威  
權。必死の刃尖向ひ前まき。矢廢は從者數十名を残し砍臥せ瘞を負はずかず。もの身鑄石ふあ  
れ。大刀折れ勢ひ窮りて竟不戰歿する。時ふ年三十歳。武勇を當時と頭と。名の後  
世まで赫奕する。義烈の世の人驚く感と。密々正元の苦提を用ひて。這年。姑摩  
姫才三歳。母御前へ河内の入氏故右馬允櫻井直忠の女兒。湯浅執河恩地櫻井山本  
の主ひ。とへとへとへとへとへとへとへとへとへとへとへとへとへとへとへとへと  
野上平石の當黨は皆是楠氏。親兄弟も零落死亡せり。のゝ残る畠山は降参す。憑  
委する。ひそひそ。懶れ楠正元。潛びて京師より赴く折玉正成の忠臣。ひそひそ。わざ  
小一郎。惟盈と喚做す。その妻縫殿。姑麻姫。娘母をありけれ。正元則内室息女。  
惟盈美婦。傳せ。金剛山の麓の山里森屋村の属村也。九の尾寺を潜せけ。抑件の尾  
寺。如意宝珠院と喚做す。地藏菩薩の灵場。當寺の住持智正禪尼。櫻井直

忠の長女也。正元の内室。筆者折勝ひ姉妹も。と舊多く慰め。方丈の傍。分根亭を造  
考。其里と母女の子舍よと。叮寧に扶持せむ。懇り一程。正元ハ復讐言の志願時至。が縛  
立地。發覺れて。竟。戦死の為体。ゑ。河内。今。正元の内室。豫覺期。と。又  
今。や。堪。哀慟悲泣。腸断離れて。竟。身故。痛。姑麿姫。ま。東  
西。辨。年二三十。才の比。孤。憲。心。公。憲。伯母の尼御前。辯。向。の。檐。  
松風峯の猿の声の。え。も。隅屋小一郎。惟盈夫婦。忠誠。の。祖。與市。劣。獨子。さう  
け。復市。を。強。禡。の。中。より。大和。遣。由縁。の。の。養。へ。と。一。い。も。ア。テ。只。朴。姫。う。城  
守。字。外。徳事。も。現。那。主君。れ。は。這。家臣。わ。正元。京師。赴。折。軍。要。金。の。残。れ。至  
後。々。ま。の。與。と。て。皆。惟盈。か。遞。與。み。れ。む。惟盈。件。の。金。を。も。坊。料。と。宿。近。頭。わ。社。園。を  
購。未。や。姑麿。手。姫。の。衣。食。の。料。と。一。又。暇。あ。折。え。陳。笠。を。張。り。弓。弦。と。作。り。て。弾。鳴。ま。く。大  
婦。の。使。用。と。と。富。よ。あ。ね。ど。寺。院。の。東。西。を。費。き。正。奴。婢。四五。名。を。役。使。ふ。而

作事嘗てせ。且節儉と自居と云ふ。姫の與ふ費を厭ひ。衣裳調度苟且の玩弄  
物をもよろづ好んで儘へ。少程不姑磨姫。方性伶俐なれ。五六才の時より一派を  
学び色葉字とく讀みり。寫てあり。知智正禪尼愛鉢。七才の春より念書。  
嘉慶元年  
經文を教ゆ。一ト乞听て忘る。特く讀書を好み。北畠准後の神皇正統紀の  
餘事々の軍記。果敢亮冊子物語を看て。君臣の得失古今の治乱勸善懲惡普  
あり。獨身を感悟して家譜と同ひ祖訓と仰ひ。而して儒書をよく学び。智を増す。  
念じ。臘月晦日見れる。伯母の尼公が奇しく遠子と僧を做す。當麻寺を房中  
將姫又陸奥守如藏尼也。高超然する智識ある。親族通家忠義の與ふ。陣歿。  
なるのヨヌ。氏も縲致。世も捷き。楠氏の女兒が生む。世の盛衰。城  
陥り幽亡。而く孤女一。俺佛門に身を寓る。過世する。今とぞ絆の効を  
解す。後住の做えをよひ。連ひ讀經と薦め。姑磨姫の情愿へ敢て菩提の道を

あわば讀ふ。深く信鑑。字を覺ゆ。宗とて。一日々と遙函。嘗て不平の事。有。僕身  
其事。あれ。正成卿の曾孫也。正元朝良の嫡女也。父祖の忠義を兼嗣て。足利義満義持を  
至る。一刀をも敵む。死をとる。感す。どうとも文学と武藝共良師。後で。年老病歿。  
得の時。運の其里に至る。本意。遂に。通良師のあれか。と願心を。而も生ま。年も稍  
八大さり。応永十一年の春の時候よ。夜。臥房を抜て。庭を。半晌許。先大智方の  
朝て。後醍醐。後村上天皇の大神靈を拜とな。次。當國。諸名神を礼拜祈請。又建水  
盆。未社。家祖南木の神を拜。亦河内郡六萬寺村岩瀬山往生院。正行の墓。不<sup>正行の墓</sup>所不  
居。金剛山。河内大和跨り。山中は精舍。大轉法輪寺。即是。今。這寺内不寄焉。有。  
あを。遙拜。并。先考河州正元先妣櫻井氏の法號。唱て祈念。凝ぎ。知る。絕て。有。  
家。とん。モ。大黒天。人喫。做て福石。福石。東大和西河内。則。河内。不。偏廢。姿  
形。駭。威。大黒天。人喫。入。喫。做。福石。福石。東大和西河内。則。河内。不。偏廢。姿  
塞の用。弘法大師の造。所。大黒堂。行者堂。辨天祠。圓伽井。蓋。這山の嶮峻。深谷。

あはれ。皇天つむぎと。のぞ。のぞ。走と。まきだち。  
雨降り雪も積折も。外よ出檐下よ鶴立て。遙矣黙禱せ。程よ鳥飛ひ免走り。壬の年。秋。  
月十五夜。やがて。今宵ハ名ふる。清光玉輪去。歳中も優て。心よ樹る雲も。きて。  
歌。月を眺る者ハ。詩歌管絃の種々。奥を添るも。ヨヌト。人を観視。草の枯ぬ。寂寥増る。  
山裏虫の音。まよ物悲。一と。亦慰る。よも。ゑ。姑麿姫。例の如く。更闌人の定。り。悄々地.  
元も。も。で。まよ。え。き。び。せんれい。あかが。まき。か。そ。て。あ。い。へ。ゑ。そ。あ。ぐ。  
庭よ立。歩て。諸神并。よ先灵を。伏拜。又拜と果て。憶。目を瞻仰。れば。巽。よ一束の白雲。あり。  
看。向。変化。疆り。きく。宛白練。と引く。ぞ。愛隸。方を。づ。中。端然。と。と。美麗。一個の神女。現つ。  
左右よ從。仙童女。が。駿羽。と執り。書。卷。と携。方。て。雲。を踏。徐々。と。惧。よ。庭前。よ。降り。來。姑麿姫。  
と相距。ひ。る。七八步。空。過ぎ。けり。登。時。件。の。神仙女。へ。姑麿姫。ふう。も。對。ひ。善哉。誓。利。尚義。童。  
女。争。大願。と。發。たる。至誠天地。感通。く。神。へ。敬。驚。鬼。へ。畏。く。幽冥人。間。遠。よ。あ。れ。ど。人。知。る。を。  
え。ゆ。ゆ。の。を。俺。の。孝義。名。憐。む。與。今宵。みづ。くら。影。向。く。阿。女。を。教。導。せ。ん。と。と。快。載。き。と。招。  
ゆ。ゆ。の。を。俺。の。孝義。名。憐。む。與。今宵。みづ。くら。影。向。く。阿。女。を。教。導。せ。ん。と。と。快。載。き。と。招。  
る。姑麿姫。謀。を。信。と。視。て。怪。や。和女郎。野婆。欲。亦。只。魑魅。软。妖怪。神明佛陀。凡夫の。

有像毎集有贊歌

不んまお金さんりち  
本集画質十六歌亦是  
作者所自題

有像第十八



あ。れ。も。ち。り。や。く。  
與。よ。灵。心。利。益。あ。り。と。ふ。も。よ。く。あ。形。貌。を。顕。す。そ。凡。夫。を。教。へ。と。せ。ま。鳥。許。を。み。せ。ま。し。疾。  
視。て。非。常。の。與。よ。隠。一。帶。た。る。枕。刀。と。核。ん。と。せ。ま。腕。麻。癱。て。術。す。り。と。神。女。ゆ。と。大。念。矢。く。  
な。よ。童。女。惑。つ。狹。机。疑。ひ。凡。夫。の。常。情。衰。も。幼。小。に。似。用。心。奇。ハ。倘。俺。う。と。詳。告。事。を。疑。  
ひ。と。釋。う。き。う。ん。心。と。鎮。や。と。听。ね。が。俺。は。是。葛。城。山。よ。幾。百。歳。と。歷。た。り。け。る。女。仙。九。六。媛。即。是。う。  
む。イ。そ。ん。む。く。そ。う。 在。昔。天。武。天。皇。の。み。は。東。宮。よ。ま。く。と。吉。野。よ。世。を。避。ひ。ア。祈。俺。那。宮。よ。給。事。せ。命。婦。妻。あ。り。け。森。  
く。う。ひ。め。や。き。  
名。を。九。六。姬。と。召。れ。ろ。去。く。所。よ。俺。性。す。と。和。漢。の。史。傳。を。讀。ま。と。大。き。き。好。み。や。う。多。く。字。  
義。よ。通。ド。五。常。八。行。是。非。邪。正。の。道。理。を。發。明。ま。り。一。々。皇。太。弟。天。武。を。お。も。み。く。る。や。う。  
が。う。又。大。友。と。白。王。位。を。爭。ふ。と。謀。せ。ゆ。ア。お。折。諫。書。と。獻。り。そ。那。議。を。否。一。稟。せ。が。も。お。職。を。  
非。礼。の。婦。言。舌。最。長。一。と。憎。せ。ゆ。ヒ。て。罪。せ。る。べ。と。悔。え。く。が。世。の。無。慄。と。覺。り。跡。を。聞。ト。亡。命。を。  
山。又。山。入。り。一。より。復。人。間。立。む。か。て。真。が。修。一。形。と。煉。り。霞。と。呑。ミ。露。路。を。舐。リ。只。松。実。を。糧。と。す。  
天地。と。共。衰。ま。仙。方。と。を。ゆ。う。一。が。或。矣。雲。と。踏。ま。あ。時。鶴。驚。り。天。日。靈。尊。朝。禁。

秦始皇の時韓國の張良が蒼海公と共に始皇を狙撃。折端で本意を遂げず。幸かして脱れ、劍術ある所以が。あの它梁王武が袁盎を殺す所。公孫述が來しと殺す。亦李師道が武元衡を殺す。皆劍俠の奇術也。を中は正あり邪也。邪も出宗を受す。漢の史遷が傳くる。刺客の傳はる事無く。上帝大く戒めゆ。袁盎を妄とつこと。みぞひところ。人を殺すことを許ゆぬものぞ。蓋劍俠の人を殺す私怨もあらず。民易の父母たまふ。無道ふと歎きるのみ。或へ國の大臣ふと。貪りて奸惡多き。或へ巨商豪農。其身一箇の利を謀りて毒と市井を流す。或へ浮屠觀音の邪説を倡へ。隱匿ある。約莫かの如き。爰よある。或へと女を殺すことをめざす。その故に趙元昊の遣くる。劍俠へ韓魏公と殺す。劉正彦。遣くる。刺客の張德遠を殺す。也曾戒を怕す。所以て倘善人を殺害す。戒と破る。身も亦屠戮を免れ。又那殺道の晁公遡君とも。命運をもて場まれ。劍俠も兵を殺すことをな。秦始皇の時韓國の張良が蒼海公と共に始皇を狙撃。折端で本意を遂げず。幸かして脱れ、劍術ある所以が。あの它梁王武が袁盎を殺す所。公孫述が來しと殺す。亦李師道が武元衡を殺す。皆劍俠の奇術也。を中は正あり邪也。邪も出宗を受す。漢の史遷が傳くる。刺客の傳はる事無く。上帝大く戒めゆ。袁盎を妄とつこと。みぞひところ。人を殺すことを許ゆぬものぞ。蓋劍俠の人を殺す私怨もあらず。民易の父母たまふ。無道ふと歎きるのみ。或へ國の大臣ふと。貪りて奸惡多き。或へ巨商豪農。其身一箇の利を謀りて毒と市井を流す。或へ浮屠觀音の邪説を倡へ。隱匿ある。約莫かの如き。爰よある。或へと女を殺すことをめざす。その故に趙元昊の遣くる。劍俠へ韓魏公と殺す。劉正彦。遣くる。刺客の張德遠を殺す。也曾戒を怕す。所以て倘善人を殺害す。戒と破る。身も亦屠戮を免れ。又那殺道の晁公遡君とも。命運をもて場まれ。劍俠も兵を殺すことをな。

十三年秋の  
這回は永  
久前より  
年小六七  
才モ田屋  
と共よ野上  
の家より  
話説の歳  
月よ前後さ  
にとをぬぎ  
看官云々

卷之三

卷之三

○曲亭翁手集新刊俠客傳第二集禹工筆工剖劂目次  
有像七十頁  
柳用之信

全卷淨書  
谷用金川  
櫻木藤上吉  
横山田扒守  
中田扒守  
田扒守  
四  
卷五  
剗刪卷  
八

○曲亭翁新編國字稗史畧目  
開卷敬驕哥俠客傳第五集  
近世說美少年錄第四輯  
水滸異傳第壹集  
ある書の水  
ゆうかゑ古  
妙所を知る  
水滸後編第十一集  
ある書の水  
且原本作  
美の一書

書 林 羣文 漢 堂 合梓  
每集五卷 初集 溪齋英泉画  
第二集以下 柳川重信画  
第三集當癸巳の十二月毎逐巻出板  
第一輯より第三輯まで先年追々小  
賣にて置し第四輯當癸巳冬十二月出板  
每輯五卷 柳川重信画

小滸は百八人の列傳を一人別ふ畧述して卷ごとに出像  
日本余叢書の批評をもとを下へて元を繙くと見る所  
足り世よ碑史を好む君子の珍を失ひ一奇書也近則  
滸後傳四十回を翻譯通俗にて加つふさう画を以て  
者のもとを正すもの有る所を筆削りと全  
手の通俗本と同が亦是一奇書也近則

水滸後畫傳第十集

妙所を知る足り世よ稗史を好む君子の珍を失へ奇書へ近刻  
ふの書只水滸後傳四十回を翻譯通俗にて加筆書き一画を以て  
且原本作者のむやまきを正すもの宣かざる所を筆削りと全  
美の一書と云ふひの通俗本と同が亦是一大奇書と云ふ近刻

卷之三

卷之三

曲亭主人閱  
美少俠客衆議評判記  
諸才子評定  
七名岡現八日

古の冊子の美少年録俠客抄の二書を批評して作者の隠微妙所を詳よ知らむをこれとてるがへ原作のも具つゝもとてがりる三格別々の工夫夷評判記十倍をとひ初編中本冊當年三月出版

説美少年録侠客流の二書世評高妙月日不  
續刻と促ゆる諸君よりあきらめ尚亦本集の  
作者畠亭翁不乞て年々一書共よ各一集五卷哉

少々おひの東洋の良方ゆて庶醫さん後ちのもの即ち切るよのとひ  
身もゆかのた云ふやを癒すを云ひて是れ諸病に効能ある医  
○精製奇應丸 大包代金武朱 中包代金武朱 ト  
小包代五 ト ト  
某種をえらみ製方どうぞお乞ひせんが如くおもむき

刊行せ年々谷生老の才美少年鋤に既ニ之轉々妻となり  
とも俠客鶴ハ稍第二集をアマサシトシムラカミテ明年  
第五集を續キサシモ及ヒテ二書相並びて四集五集と  
發販必シカド伏て稟を雲頤の君子との記と認て  
乞るよ成謹見を仰ケ  
書林 群玉堂敬識

○熊膽黒丸子 三つのい汁どりうて丸子  
○婦人づむの妙某 つむぎひらきえ後うらわの包卒四頭  
○製菴本家 神田明神下同朋町東横町 滝澤氏  
弘所元飯田町中坂下南側よゆの向 たれ沢氏

天保四年癸巳春正月吉日發行  
江戸小傳馬町五町目

大阪心齋橋筋博労町

筋博勞町  
西子屋繩兵衛  
河内屋茂兵衛板

書曰林

文  
人  
古  
事  
記  
卷  
之  
一  
三  
十  
六

The image shows the front cover of an old Japanese book. The title slip at the top right reads "美少侠客衆議評判記" (Bi Shōgekkyō Gōgi Hōpanki) in large characters, with "諸才子評定" (Shokaiji Hōdō) and "七八名岡現八日" (Shichinominaoka Genyū Hachidie) below it. The main title on the cover is "美少侠客衆議評判記" (Bi Shōgekkyō Gōgi Hōpanki). The publisher's name, "書林君羊玉堂敬識" (Shorin Konyūtō Keisho), is written vertically on the left side. The date of publication is "天保四年癸巳春正月吉日發行" (Tenpo Yonnen Kōshi Shunsei Jyōgetsu Kichijitsu Hatsuishi). The price and weight information at the bottom right includes "○家傳神女湯 諸病の妙葉 十包代百銅" (Kakushin Shinnyōshō Zoshō no Myōe Jūhōdai Hyaku no Kōjō), "○精製奇應丸 大包代金武朱" (Seisō Kiōingan Ōhōdai Kinpuju), "○熊膽黑丸子 熊のい汁どりて丸を一包代五十ト" (Kōtan Kuromaru ōzuke Kōno i Jiru toride Maru o Ichibōdai Gojūto), "○婦人金口の妙葉 妇人のい汁どりて丸を一包代五十ト" (Fujin Kanjū no Myōe Fujin no i Jiru toride Maru o Ichibōdai Gojūto), "○製菓本家神明神下同朋町東横町 弘所元飯畠中坂下南側よしの向 滝澤氏" (Seikakubonka Shinmei-jinja Shimo Tombochō Higashiyokocho Higashimachi Kōsho Onomatachō Minamise Yosinohirochō Takiawase-shi), and "○古今無類の仙女香 黒油美女香 一包" (Kogen Mukurui no Sengyōkō Kurojyu Meishōkō Ichibō).

